

ふるさと見て歩き

第77回

川砂利と碎石

常陸大宮地域には様々な地質時代の様々な岩石があり、太古から道具や石材として活用されてきました。

しかし、何か特別なことがない限り、それらの石や岩の価値、恩恵に『思いを巡らす』ことはないと思われまふ。そこで、久慈川流域の川砂利と碎石を例に、市内では一般的と思われている、石や岩の価値と重要性を、大地の地質、採掘（採取）の歴史と変遷、その利用と社会への貢献という観点から取り上げてみました。

◇資源となる岩石

常陸大宮市北部に隣接する大子町西金付近から市内盛金を経て舟生・西野内に至る久慈川流域には、中生代ジュラ紀（一億五千万年以上前）の海底で堆積した八溝層群が分布しています。八溝層群は泥岩（頁岩・粘板岩）、ホルンフェルス、砂岩、チャートなどの地層から構成されます。一部には、金鉱床に大きく関与したマグマ起源の花崗岩、閃緑岩、玢岩・斑岩なども含まれています。

また、久慈川の河原や川底の礫（川砂利・小石）や、昔の久慈川が堆積させた段丘礫層の礫の多くも、八溝層群が起源（故郷）となる岩石によって占められています。

◇川砂利

久慈川の河原や川底には礫（川砂利）が見られます。昭和三年（一九二八）開通の水郡線の工事では、その川砂利が大量に使われました。川から工事現場まで「背負い桶」で運び、その値段は六〇kg当たり五銭で、地元では貴重な現金収入となったそうです。また、下小川地区では組合を結成して川砂利の採取を行いました。



▲線路や道路周辺には久慈川から運ばれたと思われる礫（玉石や玉砂利）が多数あります（大正14年の水郡線西金駅近傍の写真、小野瀬金治氏所蔵）

採取された川砂利は鉄道で輸送され、戦争で破壊された戦後の東京の復興工事に大きく貢献したそうです。その後、川砂利の採取が禁止され、現在では水田などの地下に分布する、昔の久慈川が運んだ川砂利が採取されています。

◇碎石

常陸大宮地域には、昭和四十二年創業の第一碎石（株）所有の盛金の碎石場と、川砂利採取事業から昭和四十四年に碎石事業に参入した丸山物産（株）所有の西野内の碎石場があります。この地域の碎石の利用の歴史を振り返ると、首都高速道路、東京オリンピック（昭和三十九年）、鹿島開発、筑波研究学園都市開発などに大きく貢献しています。

現在も、採取された碎石は工事現場、アスファルト合材工場、生コンクリート工場またはコンクリート二次製品工場へ送り出され、「茨城県長期総合計画整備」の公共事業資材として多方面で利用されています。久慈川流域には常陸大宮の他に、昭和十六年の開業で昭和二十一年より関東商工（株）の経営となった大子町西金の碎石場があります。ここから碎石は鉄道の道床（線路の敷石）用として全国に出荷されたようです。常陸大宮のほとんどの地盤を支える八溝層群の地層や岩石は金・砂利・碎石などの地下資源を生みだし、地

域の歴史と経済も支え続けています。まさに『たかが石、されど石』です。一時足を止めて、周りの石や岩を眺めてはいかがでしょうか。



▲丸山物産（株）西ノ内採石場の眺望（採石場頂上から）

小野瀬金治・神長政雄・菊池和博・細貝虎雄各氏の情報や茨城県碎石事業組合発行「碎石」を参考に作成しました。

※勸自然史科学研究所 菊池芳文氏よりご寄稿いただきました。

○広報常陸大宮二月号のふるさと見て歩き（十五ページ）に誤りがありました

- ・二段 十七行目
- 誤藤 原 正菅 原
- ・四段 二十二行目
- 誤栃木県 正福島県

お詫びして訂正します。

歴史民俗資料館大宮館

☎52-1450